

インクルーシブ教育の「理想」と「現実」

ー「EdTech 時代を見据えた特別支援教育論」のコメントからー

国際関係学科 柴田邦臣

はじめに

私事ではじめるのは恐縮ながら、講師にとって 2023 年は、自分の浅薄な人生においても、もっとも悲しい年であったことは疑いもないのですが、2024 年はそれをさらに上回る悲劇と、一方で蒙昧な自分の人生においても、もっとも嬉しい事で同時にはじまりました。この「読み物」は、恐縮ながらそのご報告からはじめたいと思います。

もちろん悲しいことは、2024 年元日の能登半島地震であり、その大難に心を痛めている方々も多いと思います。被災地の方々に衷心よりお見舞い申し上げます。対して嬉しいことというのは、「学生自身の成長」です。1 月 21 日に津田塾大学の学生・卒業生が、障害のある子どもたちの学習を支援している様子について報告しているカンファレンスを拝聴したのですが、専門家も思いつかなそうな工夫やヒントが散りばめられ、本当に驚きました。彼女らが示すセンスと成長曲線の素晴らしさに、年頭早々にして今年 1 番が確定しそうなほどの、よいショックをいただきました。



図 1 報告をする学生

拙稿（「読み物」、と予告させていただいておりました）は、2023 年度 FD 講演会「EdTech 時代を見据えた特別支援教育論」への再コメントとして用意させていただいているものです。津田塾大学、白梅学園大学などの大学だけではなく、遺愛女子中学高等学校、光塩女子学院中等科・高等科、三輪田学園中学校・高等学校などの先生方にもご参加いただき、熱意のこもった貴重なコメントをたくさんいただきましたことを、あらためまして深くお礼申し上げます。

実際のところ、障害など事情があって学びに困難を抱える子ども、生徒・学生の数は、今後増えることはあっても減ることはありません。長い間、インクルーシブ教育は進めるべきだが、身近に障害のある生徒・学生が増えるのは困る、という「理想と現実

の齟齬」に直面し苦悩する立場からみますと、支える側として自ら悩み努力する学生たちの創意工夫こそが、その解決の道筋になるように感じます。浅学の身で、みなさまからお寄せいただいたご意見すべてにお答えすることは困難ですが、少しでもご参考になりますと幸いです。

1. インクルーシブ教育の「理想」について

構成員のほぼ全員が組織の硬直化を感じるのがあたりまえの現代社会において、「全員が一致同意できる」ような 이슈やテーマは、それほど多くはありません。そのなかで、自分の、ないしは自校の「授業はインクルーシブになるべきだし、できるだけそうしたい」という理想に、異論がある教職員の方々は、ほとんどいらっしゃらないと思います。「インクルーシブ教育の理想」はその意味で、本来であれば、自校の凝集力のひとつとできるようなものであるはずです。実際に、「お上」が描いている理想を、特別支援教育論の視点から復唱してみましょう。

「障害者の権利に関する条約第 24 条によれば、「インクルーシブ教育システム」とは、人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とするとの目的の下、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組みであり、障害のある者が教育制度一般から排除されないこと、自己の生活する地域において初等中等教育の機会が与えられること、個人に必要な「合理的配慮」が提供される等が必要とされている。」（文部科学省, 2012）

「特別支援教育は、共生社会の形成に向けて、インクルーシブ教育システム構築のために必要不可欠なものである。（略）このような形で特別支援教育を推進していくことは、子ども一人一人の教育的ニーズを把握し、適切な指導及び必要な支援を行うものであり、この観点から教育を進めていくことにより、障害のある子どもにも、障害があることが周囲から認識されていないものの学習上又は生活上の困難のある子どもにも、更にはすべての子どもにとっても、良い効果をもたらすことができるものと考えられる。」（文部科学省, 2012）

しかしその高邁な理想は、それぞれ教職員のみなさんが直面される現場においては、虚に響くこともあるのではないのでしょうか。「わかっちゃいるけど、むずかしい」。先日の拙いFD講演へのコメントでも、多くの先生方・職員のみなさまから、特別支援教育のトレンド、そして障害や事情のある学生・生徒が増えていることに対する戸惑いや対応が必要とのご意見をいただきました（以下コメントは、プライバシーへの配慮を踏まえ、適時改変・調整などを行っています）。

「普通学級にも軽度の学習障害を抱えている生徒を認識することが近年増えております。」（教員・中高）

「Learning Crisis の中、出席重視なのに欠席者増加傾向の必修科目の立て直しをどうするか、日々考えています。」（職員・大学）

特に先日で申し上げた内容においては、大学・中高など学校側の教育内容・方法と、学生・生徒の学ぶ意欲との不整合について、「学ぶ意志」という論点から整理いたしましたが、そこへのご意見もいただきました。

「学生の学ぶ意欲と教育内容と教育手法の不整合という試練、反転授業の取り組みの効果、Learning Crisis に対峙するFD、技術のみならずチューニングの必要性など、様々なご示唆をいただきました。」（教員・大学）

「1年必修のある科目は、ここ数年なんと1クラス分の再履修者がいます。1年必修を履修しないと2年次の科目に登録できないため、4年になっても2年選択必修を履修する者が多数います。」（職員・大学）

FD時に申し上げた中でも、学生・生徒のモチベーション＝「学ぶ意志」については、「学生・生徒のモチベーションを促す、というのはあたりまえ」で、普通の話にみえるかもしれません。同時に、それは学生側の問題で「なんで、こんなにやる気がないのだろう」「最近では学ぶ気のない低学力層が入学してきているな」などのように感じていらっしゃるかもしれません。しかしそこには、私たちが「理想と現実の乖離」に苦しんでいるのと同じくらい、学生・生徒自身が「理想と現実の乖離」に苦しんでいる結果、という側面が、あるのかもしれない。実はインクルーシブ教育の現実がもっとも理

想と乖離している理由は、教職員も学生も、自らの「理想」と、相対する「現実」が、「お互いに求め合っているのに、どんどんすれ違ってしまっている」という悲劇によって、もたらされているものなのです。

2. Learning Crisis という「現実」について

先日の FD の機会に取り上げさせていただいた「事例検討 2」は、そのような「理想と現実の乖離」を、のぞきこむような課題でもありました。

事例検討 2

あなたが担当されている、もしくは関わったり見聞きされている学生・生徒・児童などの中で、以下に当てはまるような方々は、いらっしゃるでしょうか？

- ・不登校というわけではないが、最近、遅刻したり、早退したり、欠席しがちなことが、続くようになっている。
- ・最近、宿題・課題の提出が、締切を少し過ぎたり、途中抜かしたり終わっていなかったり、やりかたが雑になったと感じる。
- ・主として体調不良が上記の理由になっているようだが、なかなか回復しきらない。

事例検討 2 については、多くのみなさまが、コメントを寄せてくださいました。ぜひここで共有させてください。

「特定の例ではありませんが、特にセミナーで明らかに講義全体の 1/3 ギリギリを狙って計画的？に欠席する学生が例年何名か出てきて手を焼いております」（教員・大学）

「例 2 で提示された生徒は、確かにいますが、教員の側から「最近体調不良でそうになっている」とは見られず、「元来、学習への取り組みの姿勢がそういう生徒」というように認識してしまっていると思います。あの手この手で（叱る、褒める、などなど）取り組みを促す古典的な方法を取っております」（教員・中高）

「(事例検討2)に関して、今年度、とても気になっているのが、全体として、課題の提出遅れや未提出が目立つことです。特に、複雑な課題については「スルー」したり、必要最低限の課題しか提出しなかったり、といった傾向が見られます。ある程度の「ちゃっかり」はしょうのないことだと思うのですが、これまでは見られなかった傾向であるため、学生が取り組む意義を感じられるような課題を設定できていないのではないかと心配しています」(教員・大学)

「完全に該当しているかわからないが、少なからずいるように思う。体調不良を理由に挙げられたら、それを信じるほかないので、体調を気遣う言葉をかけるしかない…(その方は発言などを聞いている限り優秀なのに、課題が全く出てこない)。(が、なかなか治らないですね…と伝えたら、授業に顔を出すようになった、という例もあります)」(教員・大学)

「1. 不登校ではないが、最近遅刻したり、早退したり、欠席することが増えている 2. 宿題・課題の提出が締め切りを過ぎたり、途中を抜かしたり、終わっていなかったりとやり方が雑になっている生徒」は一定数おります。一人の事例ですが、英検準2級以上を取得して中学に入学した生徒を対象に英語の取り出し授業を行っておりますが、その中で「取り出しクラス」のメンバーであること、クラスメイトよりもレベルの高い授業を受けること、それに見合ったレベルの提出物を求められることなどに対する心理的プレッシャーから学習のモチベーションを下げているようです。ちなみに決して学力が追い付いていないわけではありません。」(教員・中高)

これらのコメントを拝読して、「学ぶ意志」の問題が、学力層に限らず広範囲に起こりつつあることを痛感いたしました。実はこの例は、大学などの高等教育レベル、ないしは大学進学をめざそうという中高レベルの現実から抽出したものではありません。先日のFDでも少しだけご紹介しましたが、2020年の新型コロナウイルス感染症における社会危機から4年、障害があったり事情があったりして学校に馴染めなかったり、勉強が進まなかったりしている小中学生たちに、学生たちとオンラインで学習支援を行うプロジェクトの運営をお手伝いしてきました。私はあくまでアドバイザーの分を超えていませんが、それでも面接させていただいた家庭は数十件、その後「学びの危機プロジェクト＝まなキキ」で実施されたレクチャ&レッスン数はのべ1000回近くになります。そのなかで、実際に子どもたちが直面していたり、ないしはクラスで見聞きする（そういう子どもたちばかりが特別支援教育に回されたりするのが現実の一部です）中で、

「明確に心身の障害に起因し

ないにもかかわらず、同じような問題として発生している典型例」を集め、実例として描いてみたものなのです。私たちはそれを、それこそ「Learning Crisis＝学びの危機」の核心だと考えています。

ここで驚くべきなのは、障害のある子どもたちにとって身近な、初等の特別支援教育の現場で見られる多発例が、大学や高校のレベルにおいても、同じように頻発しつつあるという点です。先ほどの事例検討2へのコメントが、違う大学はおろか、違う中学・高校の先生からもいただけていたことが、何よりの証拠です。ですからこれは特別だったり限局的だったりする事象ではありません。COVID-19による長期休講やGIGAスクールをめぐる地域格差、さらには30万人に迫ろうという不登校児の増加だけが（それは確かにその一部ではあるのですが）、「Learning Crisis」なのではありません。それは、教育段階や地域にかかわらず、日本の教育全体の現実、「学びの意志」そのものの危機という「現実」なのです。



図2 障害児にレッスンする学生の様子

3. 教育の「現実」と「信頼すること」の理想について

社会全体においてみられる構造的課題のことを、社会学は「社会問題」と呼びます。おそらく「Learning Crisis」は、性差別や南北格差と同様の社会問題でしょう。社会問題は深刻ですが、一抹の救いもあります。なぜなら、それは社会の構造的矛盾から生まれるので、社会が変われば解決可能だからです。つまるところ、理想論で言えば、あらゆる社会問題は、解決可能です。

もちろん「現実」は、そう簡単にはいきません。拙稿でも最後に、その解決策を探っていきたいと思います。FD についてみなさまからいただいたコメントの全てではありませんが、できる範囲で私見を述べさせていただきます。

(1) EdTech、字幕関係

「理系教育ではまだまだ Old Fashion な講義スタイルが主流であり、それはそれで良い面があるとは思いますが、EdTech 時代化が加速化していくであろう現在の状況も踏まえ、どのようにして EdTech を授業理解促進に活用できるか、試行錯誤を続ける必要がある」(教員・大学)

「留学生教育をしています。字幕を自分自身で見ることで、自分の話を客観視する、というのは、留学生教育においても大切な視点だと思いました。かなり気をつけているつもりでも、どうしても早口になってしまうことがあります。この方法を授業で使ってみたいと思いました。PPT にも字幕の機能があることは知っていますが、授業で使用するという発想がなかったことに気づきました。工夫してみたいと思います。」(教員・大学)

「一人ひとりの学習効果を高めるため、captiOnline を利用した授業の要望をどのように担当者に伝えるか、要望ができるということを受講者へ伝えるにはどうしたらいいか」(職員・大学)

「字幕支援について、聴覚支援だけではなく多様な可能性があることがわかりました。特別支援でなくとも、視覚的な情報は正確に伝わりやすい、確認しやすいことがわかりました。」（職員・大学）

captiOnline、UD トークなどへのご感想をたくさんいただきました。「特定の学生のため」と思い込んでいると負担に感じるものが、「教員自身のため」や「学校としての利便性のため」と読み替えることができるものが、インクルーシブ教育にはたくさんあります。「学生の自助努力を求める」視点だけでは、これらのテクノロジー活用の可能性は、そして「合理的配慮」の道筋も、見えてきません。テクノロジーは、思い込みを取り払ってはじめて、効率的かつ有効に活用できるのだと思います。

（2）事前的改善措置、合理的配慮関係

「FD としての「事前的改善措置」のポイント

- －いきなり高度なことはしない（＝過重負担・持続性）
- －特別な支援から、全体の UD へ（＝公平性・本質性）というところが大きいポイントであると感じました。

特に配慮をする側が支援疲れにならないようにするということは重要かと思います。」（職員・大学）

「改善効果をより広い範囲で届ける事前的改善措置について、実験を交えた結果により学習効果が高まっていたことに驚きました。合理的配慮というと、被支援者への配慮と思いがちでしたがそうでないことを知ることができました。」（職員・大学）

「事前的改善措置」に関しては、恐縮な動画をご紹介させていただきました。JASSO もそうですが、障害児・者向けの支援（とくにそのテクノロジー関係）というのは、意外と狭い世界でして、私も 20 年来の知り合いなども（もちろん近年のお知り合いもいますが）もいて、津田塾着任前からの人脈で勉強させていただいていました。津田塾の IES をお預かりしていたころは、そのネットワークをどんどん活かして新しい情報を導入していましたが、まさにこのあたりは日進月歩です。コスパのよい配慮策も次々生み出されています。その意味でインクルーシブ教育には、教育研究の手法に馴染みがある

人材を積極的に配置した方が、効率も有効性も高くなる可能性が高いので、各校にもご参考になればと思います。

(3)PBL、反転授業関係（およびそのほか）

「PBLによって、何かを学ぶことの、根本の姿勢を身につける（というか、本人の中にその姿勢が形成される）」という点、大変興味深くお聞きしました。高校・大学で、学生がこういった経験を持てると良いと思います（現状、自分にできることは思いつかないのですが…）」（職員・大学）

「It's important to look at our classes from the students' perspectives and consider how to plan class content, projects, and learning outcomes to reflect today's educational realities and future needs for our students.」（教員・大学）

「様々な環境や事情のある生徒がいるので、反転授業にフォーカスしていく必要があると感じました。少し前までは対面が大切という風潮がありましたが、現在では中学高校の現場でも反転授業は尊重されています。教育では対面が大切というのを心に留めながらも、積極的に取り組む必要があると思いました。」（教員・中高）

「事前にオンデマンドで好きなタイミングで学んで授業に臨める一方で、グレーゾーンの学生等でスケジュール管理が苦手な学生にはハードルが高いようにも思うのですが、先生の実施されている授業ではどのような工夫をされていますか。」（職員・大学）

特に PBL や反転授業においてはたくさんのご感想をいただきました。その有効性をご評価いただきながらも、実際に導入するさいの課題についてのご意見もいただきました。最後のコメントにお答えするかたちでまとめると、Google Classroom など LMS で丁寧にリマインドしていくぐらいが現実なのかもしれませんが、一番重要なのは、当該の学生・生徒が、何をどこまで苦手なのか、なのだと思います。たとえばその学生・生徒は、アルバイトの出勤もままならないほどなののでしょうか？ ネットゲームのクエストにも参加できずパーティーの輪を乱すほどなののでしょうか。アイドルの推し活はオンライ

ン配信、限定グッズ販売、ライブ抽選など頻繁かつ複雑に締切がきますが、それをもスケジュール管理できないほど苦手なのでしょうか？

学生・生徒の「学びの意志」に注目するということは、障害や事情がある学生・生徒の困難に対して、そこまで踏み込まざるをえない現実を、思い知らされるということでもあります。学生・生徒に教えたことがあるが、その重要度は理解されず、学生・生徒の側も青春をかけたいことがあるのに、それは学校では十分に評価されない。「お互いに求め合っているのに、どんどんすれ違ってしまっている」この現実、理想論から述べさせていただくと、ある種の「教育の失敗」ということができるのだと思います。

私たちは「教育機関」です。教育機関とは、学生・生徒が「必要だができないことをできるようにする」ところです。もしも問題が「学ぶ意志」にあるのであれば、インクルーシブ教育の困難も、合理的配慮の辛苦も、Learning Crisis でさえ、その問題構造は、学生・生徒に必要性を理解させられず、できないことをできるようにできないという意味での、「教育の失敗」にこそあるのです。

それでは私たちは、その問題を解決するために、どうすればいいのでしょうか。現実

論でいいますと、ここで「学ぶ意志」を育てるためのテクニック、ノウハウ、教授法のようなものは、ほとんど役に立たないでしょう。「子どもの集中力を監視し管理するテクノロジー」や「子どもの興味に最適化させられる AI」なんてものも、簡単にソーシャル・ハックされて、有効性を

失うでしょう。その意味でも、私たち教育にかかわる人間は、「現在の学生・生徒を、信じすぎてはいかない」のかもしれない。彼ら彼女らはいろんな希望や意見を言いますが、「教育の理想」にきちんと従って言えば、彼ら彼女らは、「まだ必要性を理解できておらず、できるようになっていない」主体なのです。そのような未完成な主体の要望は、教育の理想の立場から言えば、信頼に値しません。これから彼ら彼女らを信頼に値する存在に高めていくことこそが、教育の理想なのです。

では、学生・生徒を信頼してはいけないのか。ここで気をつけなければならないのは、あくまでそれは、「現在の」という意味だと言う点です。私たちが信頼すべきなの

2-1. レッスンで大切にしていること

【Aさん】

- ・ 質問に丁寧に答えていく。
→「疑問を持つことは、すごいことなんだ」ということの証。
- ・ 空間を共有できることを活かす。
→身近なことが学びにつながっていること、日常で気になったことをどのように調べられるかということを示していく。
→その場で新しい教材が生まれていく。

【Bさん】

- ・ 蛇を切ってもらう。
→学びの「ナビゲーター」としての役割。
- ・ ひとつの単語や文を丁寧に整理する。
・ 好きな歴史の学びが、英語につながっていることを示す。
→納得して学ぶということ。

- 【共通】
- ・ 自分が勉強していて面白いと思うこと。→ 英語でも、学年に拘わらず、アカデミックな学びは可能なのでは？
 - ・ 努力の仕方と一緒に考え、レッスン外でも学べるように。→ 自立した学び手。

図3 創意工夫する学生の報告の一例

は、「未来の学生・生徒」、その可能性の方です。教育の結果、必要性を理解しできるようになった学生が、どれほどの可能性を示してくれるかを、私は先日の「学びの危機カンファレンス」で目の当たりにしました。

もうひとつ、必須なのは、自分たちが学生・生徒に教育しようと思っている内容が、本当に学生・生徒にとって必要なのかを、徹底的に考えることだと思います。学生にとって必要かどうかは、本当は現在の本人たちにはわかりません。わかっている子どもたちは、誤解しているだけです。一方で、その道の専門家という方々にご講演いただいても、文部科学省の役人のお言葉をいただいても、それでわかったり決められたりするものでもないはずです。教育機関においてそれを決めるのは、教育にたずさわる人間の「見識と良心」です。自らの、ないしは自分の同僚＝仲間の、「見識と良心」を信頼すること。おそらく学問・科学の「理想」に由来する、その信頼を取り戻す覚悟と努力こそが、私たちがまさに直面しつつある「現実」に、有効打を放つ、唯一の方法に思えてなりません。

おわりに

インクルーシブ教育の話からずいぶん遠くなったと思われる方には、それが教育のあり方の基底を問う、ないしは解説しなければならないような時代になってきた、という応答で、この「読み物」を終わりにしたいと思います。私はそれを真の Learning Crisis と呼んでいて、その観点にインクルーシブ教育の地平からたどり着いたのですが、結局「理想論」じゃないかと言われれば、まさにそのとおりです。今回も現実的に「こうすればいい」などという特効薬はご提示できませんでしたし、そもそもこれまでも（口下手でコミュ障気質が大きいと自覚していますが）、理想論を掲げて多くの失敗をしご迷惑もおかけしてきましたので、お詫びこそあれ偉そうにいえることはありません。

しかし、障害や事情のある子どもたちの学習、インクルーシブ教育の課題、そして Learning Crisis の困難に、有効な解答策が出つつあるのも、また現実なのです。津田塾大学の学生・卒業生の皆さんが、誠実に向き合い努力してきた結果のご報告は、障害や理由があって「学ぶ意志」の喪失に直面しかけている障害学生・生徒、ないしはそうではない一般の学生・生徒に向き合う際に、とても役立つことばかりでした。「まなキキ」の学生のみなさんは、2024 年度中に自分たちの工夫や姿勢を、クラウドファンデ

ィングで書籍として上梓することを計画されていて、それらの書籍こそが、先生方のご疑問に強く応える道標のひとつになるかもしれません（まなキキ, 2020-24）。ここにこそ「理想と現実の協働」が現れているようにも思います。結局、「教育におけるあらゆる問題の回答は、子どもの中にある」なのでしょう。お手元にご案内が来た際には、ぜひご高配いただけますと幸いです。

この度のFDは、津田塾大学教育研究支援事務室のみなさまの創意あふれる発案からはじまり、ご関係の教職員のみなさまのご厚情を経て、今までにない企画となっているとお伺いしております。そのアイデアに

十分応えることができず、最後まで失敗を重ねただけであったことを恐縮しております。ただ、いくつかの工夫の紹介や導入、さらにはプロジェクトへの助言をとおして、インクルーシブ教育の立場からの教育における理想と現実の協働の可能性を、少しでも浮き彫りにすることができましたら幸いです。2024年は職場のご縁もあって、もうひとつのライフワークである能登半島地震の支援活動にかまけることになりそうですが、インクルーシブ教育の新しい可能性は、学生自身の手で、しっかりと引き継がれていくことと思います。これまで長らく拙文にお付き合いいただきましたことに、心からお礼申し上げます。



図4 学生のイベント報告の様子

参考文献

文部科学省, 2012, 「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」

まなキキ・プロジェクト, 2020-2024, 「学びの危機プロジェクト」

<https://learningcrisis.net/>